

学習者同士の会話練習をやる気にさせる授業設計の改善とその実践

- 『できる日本語 初級』を使って -

The improvement of class management to motivate student's conversational activities and its practices.

- Using "Dekiru Nihongo" -

藤田裕一郎

#### 要旨

本稿では、自身の初級クラスの授業を振り返り、会話練習がより活気に溢れたものになるよう授業設計を改善し、実践した。改善点は、学習目標を明確にするため、1回の授業で扱う3つ程度の文型項目を一連の場面としてつなげ、それぞれの文型項目における練習までをワンステップとし、毎回の授業の最後に教師の前でペアで一連の会話を発表することで授業の目標を達成するようにしたことである。

本実践を1学期間行い、1) 教師自身の振り返り、2) 機関が実施する学習者アンケート、3) この授業設計について学習者に直接聞いたアンケートによって評価した。その結果、機関の学習者アンケートによる他教師との比較では差が見られなかった一方で、教師自身の振り返りと学習者に直接聞いたアンケートでは肯定的な意見が多く、ペアで目標を達成しようとする取り組みの中で協働やペア間の競争意識が生まれ、それが会話練習のやる気を喚起したのではないかと考えた。

キーワード できる日本語 会話 やる気 授業デザイン

## 1. はじめに

主教材を使った自身の日本語初級クラスの授業を振り返ったとき、学習者は文型導入時やドリル練習時は元気よく声を出しているものの、文型を運用する会話練習になると、元気がなくなったり、だれてしまったりするよう感じられることがあった。そこで、会話練習がより活気に溢れたものになるように授業設計を改善し、実践することにした。

## 2. 活動内容とその目的

### 2.1 授業デザイン

主教材を使用した従来の授業では、各回の授業で3つ程度の文型を扱っていたが、それぞれの文型項目につながりがなく、別々の3項目として扱っていた(図1左〈従来型〉)。また、学習成果を確かめる復習テストは後日筆記テストによって行っていた。しかし、この授業設計では学習者にとって日々の学習目標が見えにくいこと。一生懸命口頭練習をしても、筆記テストでは練習の成果が発揮できないことなどの問題点があるように思われた。

そこで、優れた教師の具体的指導を真似することによって自身の授業をデザインした横溝(2011; 2014)に倣い、「動機付けをし、目標にたどり着けるための small steps を組んであげる」、「学習者一人ひとりに向き合うために、生徒が教師の目の前でできることを証明する」という田尻の実践(田尻, 2009)を取り入れ、図1右〈改善型〉のように授業をデザインした。

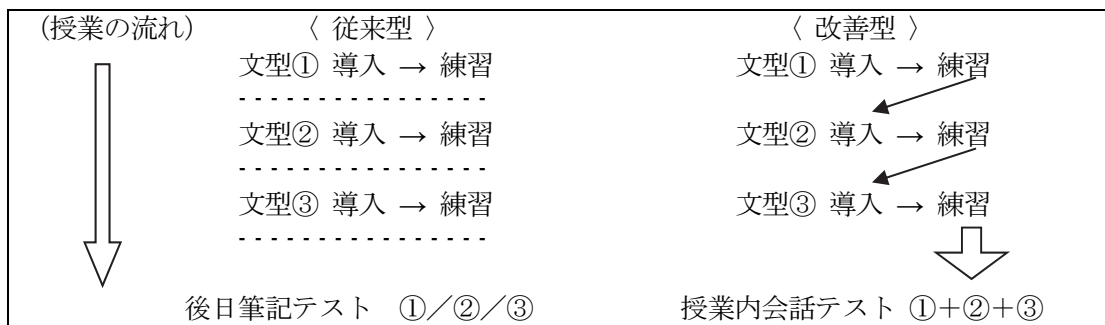


図1 授業設計図

〈改善型〉では『できる日本語 初級』の各課の構成に則り、「病院で簡単に症状を話す」「医者  
の指示を聞く」「薬局で薬の飲み方を聞く」のように、扱う文型項目を一連の場面としてつな  
げ、それぞれの文型項目の練習までをワンステップとし、授業の最後にペアで3つ程度のステ  
ップの積み重ねの会話を会話テストとして発表することで授業の目標を達成するという形にした。  
毎回の授業で扱う文型を一連の場面としてつなげることで一つひとつの文型をスモールステ  
ップとし、授業の最後に会話テストをすることで、学習者が教師の目の前でできるようになっ  
たことを証明するようにしようと考えたわけである。会話テストは、ペアで教師の前で絵を見なが  
ら会話を発表するというもので、課題の遂行度やその日の学習文型の正確な使用などによって合  
否をつけた。会話テストの前には各ステップの会話を復習する時間を与え、復習が終わったペ  
アから教師のところに来よう指示した。会話テストに不合格だった場合は席に戻ってもう一度  
練習をした後、再度会話テストに挑戦し、合格できたらプリントをもらい、まとめ練習を行うよ  
うにした。授業内にプリントのまとめ練習ができれば提出し、できなければ宿題とした。

## 2.2 学習者と教室のレイアウト

本授業実践を行ったクラスの学習者は12名でベトナム人が8名,その他,中国,ミャンマー,ニュージーランド,トンガの学習者がそれぞれ1名ずつだった。学習者の日本語レベルは初級で,日本語学習歴は0から6か月程度だった。本授業実践を行った授業科目は文型・文法で,月曜日から金曜日までの各日に90分の授業があり,使用教材は『できる日本語 初級』だった。

教室は学習者がペアやグループで練習がしやすいよう図2のようにレイアウトし,1週間ごとにグループのメンバーをシャッフルした。テストのペアは隣または正面に座っている学習者だった。

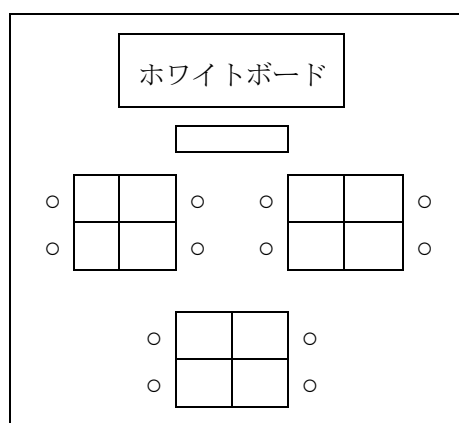


図2 教室のレイアウト

## 3. 授業の実践

〈改善型〉による授業実践を1学期間(約4ヵ月)行った。おおよその時間配分は各文型に20分ずつ,会話テストに15分だった。上述のように,主教材を使った本授業は各日90分で,実践者である筆者が週2回,他の教師3名がそれぞれ週1回ずつ担当した。他の教師はこのような授業デザインによる授業実践は行わなかった。

## 4. 結果

この授業実践を,教師自身の振り返り,機関が実施する学習者による授業改善アンケート,この授業設計について直接学習者に聞いたアンケートの3点によって評価した。

教師自身の振り返りは学期終了後に〈従来型〉と比較する形で振り返った。教師の振り返りでは,会話テストで学習者と個別に向き合う機会ができ,学習者それぞれの学習状況がよく見えるようになった。会話テストを見据え各ステップにおいて学習者が必死に会話練習に取り組むようになった。学習者同士に助け合いが生まれたと振り返った。

機関が実施する学習者アンケートでは,本授業実践に関係があると思われる,「教員は,学生が興味を持てるような工夫をしていたか」,「教員は,学生に対して熱心に,そして丁寧に対応していたか」の項目について,〈改善型〉の授業実践を行った実践者と同クラスを担当した他の教師と比較した。その結果,〈改善型〉の授業実践を行った実践者の評価はどちらも5点満点中4.91点だったのに対し,同クラスの他教師はどちらの項目も平均4.81点(いずれも最低4.75点,最高

4.9点) だった。

この授業設計について直接学習者に聞いたアンケートでは、毎回の授業の最後にペアで教師の前で発表したことについてどう思うか、日本語または母語か英語で自由記述してもらった。その結果が表1である。

表1 学習者に直接聞いたアンケートの結果

a.日本語がだんだん上手になりました。
b.私はいいと思います。そのときに私は大好きです、間違えたとき先生が直します。みんなが上手になると思います。
c.私にとって授業はいいです。みんなは日本語で話せます。
d.文法がよく覚えられます。話すことで聞く練習にもなります。
e.会話テストのために話した会話はよく覚えられます。
f.みんなは練習できるし、自分で話せるし、勉強したところを使えます。
g.とてもいいですが、ちょっと遅いと思います。早く終わるほうがいいと思います。
h.発表するのがいいと思う。話すことが上手になります。
i.時々遅く終わった。

表1によると、会話テストのために一生懸命覚えようとすることで、学習が進んでいると感じ、肯定的に捉えている学習者が多いようである。一方、授業終了時間を過ぎてもテストが終わらず長かったという否定的な意見も見られた。

## 5. 考察

機関が実施する学習者アンケートでは実践者と他教師との差がほとんどなかったこと（5点満点で、それぞれ4.91点,4.81点）から、本授業実践は授業全体にインパクトを与えるような影響はなかったのではないかと考えられる。

一方で、学習者に直接聞いたアンケートの中に「会話テストのために話した会話…」(表1e)、「みんなは練習できるし、自分で話せるし、勉強したところを使えます」(表1f)のように、練習において会話テストを意識しているような記述が見られること。教師の振り返りにも、「会話テストを見据え各ステップにおいて学習者が必死に会話練習に取り組むようになった」との記述があることから、授業の最後のテストを見据え、各ステップにおける会話練習を前向きに取り組んでいる様子が窺える。これは、毎回の授業の最後にテストがあることが分かっていること。早くテストに合格して、プリント練習を授業内に終え、宿題を減らしたいとの気持ちがあること。各ステップの会話練習をしっかりとやればテストに合格できるという成功体験や達成感を積み重ねていることなどが動機になっているのではないかと考えられる。

また、教師の振り返りにおいて、「学習者同士に助け合いが生まれた」との記述がある。実践者である筆者の観察では、各ステップの会話練習時に、いわゆるできる学習者からできない学習者に対するフィードバックに限らず、できない学習者からできる学習者に対してもフィードバックが行われていた。学習者に直接聞いたアンケートの中にも、「みんなが上手になる」(表1b)のように、他者を意識したコメントがいくつか見られる(表1c, f)。これは、授業の最後に行われ

る会話テストで、ペアの一方がうまくできてもう一方がうまくできなければ不合格になるというシステムから、ペア同士のチェック機能が働いたこと。協力して他のペアよりも早く会話テストに合格したいという競争意識が働いたことなどがその要因ではないかと考えられる。

これらのことから、〈改善型〉による授業のデザインによって目標が明確になり、ステップを積み重ねて目標に到達しようとする中にペア同士の協力関係が生まれ、協働やペア間の競争意識などが会話練習のやる気を一定程度喚起したのではないかと考えられる。

他方、学習者に直接聞いたアンケートの中に「終わるのが遅かった」との記述が見られた(表1g, i)。本授業実践を行ったクラスの学習者は12名で毎回6つのペアに会話テストを行っていた。すべてがスムーズに進むときは授業時間内に全員の会話テストが終われたが、各ステップでの練習が長引いたり、会話テストで再テストを受ける学習者が多くなると、授業時間内には終われず、時間を延長して会話テストを行うこともしばしばあった。この点について、各ステップにおける会話練習の内容やその時間配分などを再考する必要があるだろう。また、田尻(2010)や横溝(2014)などは自宅学習の必要性和重要性を述べ、自宅学習と授業をうまく結びつけることで、学習者のやる気や学習効果を相乗的に高めようとしている。本授業実践では教科書の各課の新出語を覚えてくることを予習とし、『できる日本語 わたしの文法ノート 初級』を宿題としていた。今後は自宅学習の内容を再考し、自宅学習と授業を有機的に結び付け、〈改善型〉による授業がより効果的、またスムーズに進むように改善していく必要があるだろう。

この他、このような実践をどのように定期テストに結びつけていくか、また学習者が増えた場合どのように対応するかといったことも今後の課題であると思われる。

## 6. まとめ

本稿では、会話練習がより活気に溢れたものになるよう、文型項目を一連の場面としてつなげたり、授業の最後にペアで会話テストを行うなどの授業デザインを改善し、実践した。

その結果、ペアで目標を達成しようとする取り組みの中に協働やペア間の競争意識が生まれ、それが会話練習のやる気を一定程度喚起したのではないかと思われた。一方で、授業終了時間を過ぎて、テストが終わらないとの意見もあり、授業全体の時間調整や時間配分、また自宅学習との連携など、更なる授業改善が必要であると思われた。

## 参考文献

田尻悟郎(2009)『(英語) 授業改革論』 教育出版

できる日本語教材開発プロジェクト(2011)『できる日本語 初級』アルク

できる日本語教材開発プロジェクト(2011)『できる日本語 わたしの文法ノート初級』凡人社

横溝紳一郎・大津由紀雄・柳瀬陽介・田尻悟郎(2010)『生徒の心に火をつける -英語教師田尻悟郎の挑戦-』 教育出版

横溝紳一郎(2011)「教師開眼物語!! 私が腕を上げたとき」『月間日本語』 1月号, p.16. アルク

横溝紳一郎(2014)「優れた教師からの学びを、自分自身の実践にどう活かすのか -上級学習者への発音指導で、授業と家庭学習のつながりを求めて-」『言語教育実践 イマ×ココー現場の実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ』2, pp.96-106.